
夢のまた夢

雑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のまた夢

【Nコード】

N7420Y

【作者名】

雑

【あらすじ】

夢を見る。

繰り返し同じ色合いの夢を。

夢の中で僕は、存在しない歴史上の人物の息子だった。

一応、戦国時代というか安土・桃山時代っぽい時代。

主人公が大好き！な登場人物ばかりですが、ハーレムにはならず。

(登場人物が圧倒的に男ばかりなのと、色気がまったくないから)

時代考証の甘さと捏造満載な為、何でもありなファンタジーカテ
ゴリーにいれさせてもらいます。

大昔の蔵出し品：順次アップしていきます。

プロローグ

「おまえさまっ、また浮気したねっ」

「痛っ、いたい、いたい、いたい、おね様、堪忍っ、堪忍してちょーだい」

風采の良くない小男が、気丈そうな女に怒鳴り飛ばされている。

「何回目だと思ってるの！」

「えーと、えーと……5回目だがや」

「今年に入って、12回目やーっ」

指折り数えた男の頬に女の拳が会心の一撃を見舞った。

そのあまりの見事さに思わず感心してぱちぱちと手を叩いた。

「弥々丸……どうしたね？もう遅いから寝んと。子供は寝るのも仕事だよ」

驚いた顔で女が振りむく。

正式には弥勒丸と言うが、そう呼ばれるのは改まった席でだけだ。

「かわや、いく」

「おやおや、あんたはエライ子やねえ。それくらいの年の時、市やお虎は、しょっちゅうおねしょしてたんだけどねえ」

立ち上がった女は、羽織っていた打掛をそのまま畳に落とし、間着姿で歩き出す。

「……いちととらがおねしょ？」

「そうさね。市は今は大らかな顔してるけど、やんちゃなくせに泣き虫だったんよ」

「ふうん」

手をつないで長い廊下を歩く。

厠までは遠い。途中の道は暗いし、段もあつて幼児には困難だ。そして、市松が厠の肥溜めに落ちた話を聞いて以来、絶対に一人では行かないと決めていた。

「……おつかあ、おつとう、のびてたな」

ぎゅっと握り締める手の暖かさが好きだった。

「あれくらい、ええんよ。まったくおつとうは浮気もんで仕方ないわ。……あんたはよそで女子こさえて、女房を泣かすような真似したらあかんよ」

「……うん」

よくわからないながらもうなづいた。

呆れたような母の笑みは慈しみに満ちていて、本当に仕方ないと思っているようだった。

その笑みをとても美しいものだと感じる。

「弥々丸はいい子だね。あんたはあたしの宝だよ」

「だから？」

「そうや。あたしとあの人の一番の宝だよ。……この城も、上様からいただいた駿馬も、立派な茶碗やお道具も、おまえに比べたら何の価値もないさね」

嬉しくなって笑うと、母も笑った。

心がほっこりと温かくなった。

第一章 幸也(1)

夢を見る。

繰り返し、繰り返し見る夢はいつもどこか時代がかっている。

「……や、ゆきや、幸也……」

ゆらゆらと身体を揺らす手。

柔らかな香りに心が和らぐ。

(……栞の香りだ)

甘さを残しながらどこかすつきりとした香りは、栞の好んでいる香水だ。薄いピンクのボトルのサムライウーマン……学生時代、一番最初のバイト代で彼女にプレゼントした香りだった。

「……栞」

ゆっくりと目を開く。

覗き込む栞が笑みを浮かべる。

「もう、起きてよー。全然片付かないんだから」

「……」
「めん」

苦笑して、そっとその頬に口付ける。

「……おはよう、栞」

「おはよう、幸也」

顔を見合わせて、もう一度、今度は唇に口付ける。

僕が大学を卒業し栞が高校を卒業した8年前に結婚した。早すぎた結婚だったが、家が隣同士でどちらの親も公認の恋人期間が長かった為、反対はまったくなかった。両家とも、親族らしい親族もいなかったせいもある。

栞が大学に進学し、次いで大学院にも進んだために2年前まで学生だったから、子供はまだいない。

そろそろ作ってもいいねと二人で話してはいたが、特別に努力しようとかそういうつもりはなかった。

7歳までの記憶がなく、施設から養子として引き取られて育ったものの、18歳の時にその養子先の両親を相次いで亡くした僕には子供というのはピンとこなかったし、生まれてくる子供より栞の方がずっと大切だったからだ。

なかなか養子先の家に馴染めなかった僕が、養家の父と母に慣れ、打ち解けることができたのは栞のおかげだった。

小さな小さな栞は、どういうわけか一目で僕に懐いた。遅くに出来た一人娘を溺愛していた隣家の両親は、僕の父母に頼み込んで栞をよく預けにきたものだった。

それは成長してもずっと変わらず、僕はいつも栞と一緒にだった。

幼い頃の記憶のない僕はいつもどこかぼんやりした子供で、ここにいる自分を信じきれていなかったけれど、栞がいれば不思議とそんな気持ちにはならなかった。

栞は僕とこの世界を結ぶ絆だった。

僕は自分が異物であるかのような……この世界に馴染まないもののような気がしていたけれど、栞さえいれば普通に暮らしていられるのだ。

「……また、夢見たの？」

「うん。……どうして？」

「何かぼーっとした顔してるから」

「……夫婦喧嘩してたよ……浮気したって言って」

それだけで栞にはすべて通じる。

「……また？」

「そ、また」

「懲りないねえ」

「……そうだね」

栞はくすくすとおかしげに笑った。僕はその屈託のない笑顔がまぶしくて目を細める。

「……夢の中に、私は出てない？」

「今のところはいないみたいだ」

「残念。……夢の中でも幸也のそばにいたいのに」

「僕もいて欲しいよ」

栞がいたらすぐにわかるだろうと思う。例え、どんな姿をしていても。

「じゃあ、登場したら教えてね」

「勿論」

いつも僕が見る夢は、僕らの間のちょっとした話題だった。

同じ夢というわけではない。でも、どこか同じような色合いの夢で、舞台はいつも一緒だった。

僕は幼い武家の子供で両親がいた。

陽気で楽しい父としっかりものの母……温厚な叔父や、年上の遊び相手達……いつもどこか曖昧で、それでいて目覚めるとその感触が身体に残っているほど生々しかった。

「実は本当だったりして」

「そりゃあ、ありえないんじゃない？時代が違いすぎるし」

「えー、そこらへんはほら、生まれ変わりとか……」

「ない、ない」

「どうして？」

「だって、秀吉とねねの間には子供なんていなかったわけだし……」

笑ってしまうことに、夢の中で僕は豊臣……夢の中ではまだ羽柴と名乗っている秀吉とその妻であるねねの子供だった。

「知られてないだけで本当はいたかもしれないでしょ。秀吉とねねの子供ってところだけ抜けば、矛盾点はほとんどなかったし……もしほんとだったら……もしかしたら、生まれ変わりとかがかも」

そう思うとときどきするんだよねえと栞は笑う。

「でもさ、例えばあの子の存在が本当だったとして……今、記録に残っていないっていうことは、早くに死んだのかもしれないよ。もしくは、何かのドラマとかを見てそれが記憶に残っているのかも」
「調べた限り秀吉とねねに実子がいたっていう設定のドラマや映画ってないんだよ。……早死説はありそうだけど……」
「もしくは、僕の空想かも」

笑って言う。

「それこそありえないよ。……幸也、超現実主義者だもん！そんな空想できるはずないって」

「ひどいな、栞。僕だって空想くらいするよ」

夢の話は僕のただの空想や妄想だと笑い飛ばさないのは栞だけだ。もしかしたら、僕の失われた幼少時の記憶を取り戻す手がかりになるかもしれないと、二人で僕の夢を詳しく検証したこともある。……記憶のないことは、僕のコンプレックスの一つだった。

空白の記憶……どんなに幸福の中にあってもそれがまるで刺のようにつき刺さっていた。

それが気にならなくなったのは、栞と結婚してからだ。記憶などなくとも栞は僕を愛してくれているのだという自信が持ててからは、我ながら現金なことにまったくどうでもよくなった。

当時の副産物として、僕と栞は異様に戦国時代に詳しい。

栞の父である僕の恩師、上月教授の趣味が時代劇鑑賞であり、上月家には膨大なビデオコレクションと膨大な資料・小説コレクションがあつて調べるのに不自由しなかつたせいもある。

家紋をみればどのものかすぐにわかるし、主だった家系図や系譜はすぐに頭に浮かぶ。年表だつてかなり細かく覚えている。まあ、小説などのフィクションも混じっているし、後世に書かれているものだから正確だとは言い切れないものもあるだろうけれど。

「いいの。私は生まれ変わりに一票」

「……生まれ変わりなんて信じるの？」

「また幸也に会えるなら信じる」

「栞……」

「これだけ幸也のことが大好きなんだもん。きっと何回生まれ変わっても私は幸也と会おうから」

真面目な顔で栞が言う。

「……そうだね」

心がふわりと温くなる。栞はいつも僕を救ってくれる。

「最初に会った時、やっと会えたって思ったの。きっと幸也を待っていたの。……幸也のあざを見た時に、なんでかな……間違いなんて思ったの」

僕の肩には変な形のあざがある。瓢箪の形にも見えるそれは普段はシャツの下でわからない。どうやら最初からあったらしく、記憶喪失の僕の身元を照会するための記録にも載っていた。

「目印だったのかな」

「……そうかも」

「じゃあ、栞の目印のそのあざだね」

そつと栞の手をとる。

左手首、普段は時計で隠れているそのあざは花の形をしている。

「次に生まれ変わっても、僕とまた結婚してくれる？」

そつと僕はそのあざに唇をよせる。

「勿論。……ちゃんと見つけてね」

こくりと栞がうなづいた。

「うん」

僕はぎゅゅつと栞を抱きしめた。

他愛のない約束だった。

生まれ変わりとか、魂とかそういうものを信じているかと聞かれたら、たぶん僕は信じていなかった。

僕が信じていたのは栞で、栞が信じているものだから僕は信じて

いた。

世界中のすべての人が嘘だと言っても、僕は栞の言葉を信じるだろ。

第一章 幸也(2)

「今日はどこかに出かけるの？」

「あとでスーパーに買い物に行くつもり」

二人暮らしのマンションは、2LDK。川側に立つこの中古マンションは眺めが気に入って決めた。まだローンは残っているが、仕事関係のコネのおかげでかなり格安で購入できた。

ここは、栞と僕のささやかな城だった。

生成りとアイボリーを基調にしたインテリア……新婚旅行で行ったバリのホテルを真似している。築18年とやや古いが管理はしっかりしていて、手入れもきちんとされているし、何よりも最寄駅からは徒歩五分というアクセスの良さがとても便利だった。

徒歩圏内にスーパーが3軒もあって生活環境も悪くない。マンションに戸数分の駐車場はなかったが、都内に住んでいる以上、車はほとんど必要なく、僕ら夫婦はどちらも運転免許を持っていなかった。

「僕も途中まで一緒に行くよ。本が届いたって連絡があったんだ」
「うん」

大学は以前から興味があった建築科に進んだ。ゼミで選んだのは中世の城郭建築。卒論は『安土桃山時代における建築技術の粹 - 大阪城と聚楽第』だった。その後、大学院に進み、講師を経て、去年昇進して准教授と呼ばれる身分になった。昇進スピードとしてはわりと早いほうだ。

現在は、中世日本の城郭と海外の城郭との比較研究をされていて、某大手ディベロッパーの研究所の顧問にも名を連ねている。

栞は専業主婦で、今はベランダの小さな畑に夢中だ。これは前の持ち主が作っていたもので、ベランダの一部に土をいれて畳二枚分くらいの小さな家庭菜園になっている。今は枝豆とナスときゅうりとトマトの収穫期で、毎日それらの野菜が工夫を凝らして食卓にのぼる。

「そういえば、滝口さんがたまには道場に顔を出して下さいって」
「……そういえば最近行ってないや」
「でしょ。たまには道場で汗流してくるといいよ」

杉原の家に引き取られてから、義父が道場の師範代だった関係で剣術をはじめた。

最初は竹刀を使う剣道だったが、中学を卒業した頃から剣術へと変わった。自身を律することのできる剣が、僕は好きだったし、鍛錬の為に今も月に何度かは道場に行くことにしていた。

「……それもいいかも」

本屋の帰りに顔を出そうかと、考える。

「そしたら、道場にお迎え行くね」

「いいよ。少し遠いし」

「いいの。久しぶりに袴姿の幸也、見たい」

「……そんなの」

「いいの、格好いいんだもん！」

はつきりきつぱり言い切る栞に僕は俯く。

人間、こつも真顔で褒められるとどうしていいかわからないものだ。ましてや、相手が妻なのだからもっとどうしていいかわからな

い。
そんな、どうしていいかわからない無言の中で、シンプルな月見うどんと一口サイズの豆いなりを盛り合わせた昼食をとった。豆いなりはいろいろあるな具があつて、食欲をそそる。

僕らは互いに無言でいても全然苦にならないで過ごせる仲だった。互いの呼吸を合わせるようにひっそりと二人で寄り添っていらればそれだけで良かった。

栞が準備している間に僕が皿洗いを済ませると、僕らは手をつないで出かけた。

「3000円以上買えば、宅配してもらえるから、お買い物終わったら道場に行くね」

今日はね、トイレットペーパーとか洗剤も買うからそれくらいすぐいっっちゃうんだよ、と栞が笑う。

「……見ててもつまらないでしょ」

「そんなことないもん。……幸也が剣道してるの見るの好きだし」

「剣道というより、剣術」

「何が違うの？」

「竹刀は使わないだろ」

「……そういえば、そうだね」

「刃こそついていないけど、あれは本物と同じ重さがあるんだ」

通常より三寸ほど長い太刀で抜刀したり振るったりは、それだけ力が必要だ。だが、それさえ克服できれば長いというのは必ずしも不利なことではない。

通常の抜刀術は一撃必殺。抜いた刀をかわされればそれでおしまいによいものだったが、僕が学んだ流派は一の太刀としての抜刀

術があるものの、抜刀後も二の太刀、三の太刀と続く実戦を重視した剣術だった。まあ、この平和な世の中で実戦なんてあるはずなかったが。

「ふーん。幸也が剣術するのって、夢のせい？」

「どうだろう。まあ、影響はゼロじゃないと思うよ」

「……今の幸也が夢の中にいたら、きっとすごくいい若様になるね」

「それはわからないよ」

子供の頃しか夢に見たことがなかったし、そもそも現代人が戦国時代にいっても何もできないと思う。実戦を重視した剣術とは言うが、正直、自分に人が斬れるとは思えない。

「あ、じゃあ、買い物したらいくからね」

スーパーの前で立ち止まる。

「うん。……また後で」

「今日のお夕飯は何がいい？」

「……そうだな。中華、かな」

「わかった。任せて」

菜の作るものは何でも好きだったけれど、特にすきなのはビーフシチューと餃子だった。

菜の作る餃子は、羽つきのカリカリで中に肉汁がたっぷりで閉じ込められている。肉ががつつりできるとろのビーフシチューは、いろんな旨みがいっぱい凝縮されたデミグラスソースが絶品だった。

スーパーの前で僕らは別れた。

僕はずっとそこに立って栞が中に入るのを見送った。
入り口でそれに気付いて、笑顔で手を振る栞に手を振り返す。どこかの子供がそれを真似して手を振っているのを見たら、何だかむしよようにはずかしくなって足早にそこを立ち去った。

それが、僕が笑っている栞を見た最後だった。

僕の世界は、突然、真つ暗闇に塗りつぶされた。
道場に来る途中で、信号無視のトラックとスピード違反の乗用車の事故に巻き込まれた栞は、物言わぬ亡骸となって病院の霊安室に横たわっていた。

この日、僕は栞……僕のたった一人の家族を、最愛の妻を、……
僕の世界のすべてを、失ったのだ。

第一章 幸也(3)

葬儀が済んで、僕は大学を辞めた。

何のアテがあつたわけではなく、ただもう柔のいない生活を送ることが耐えられなかつた。

柔の両親や、同僚達は何度も引きとめたが、もつとつにもならなかつた。柔のいない世界で呼吸をしていることすら苦痛だつた。

だが、死を選ぶ事はできなかつた。

そんなことをしても再び柔に会えるとは思わなかつたからだ。

僕はただの抜け殻だつた。

ただ、食べて、寝て、息をしているだけの抜け殻にすぎなかつた。柔がいなければ、僕には何もなかつた。

朝、目覚める。

家庭菜園に水をやる。

ゆつくりとミルをひき、コーヒーを落とす。

コーヒーは、柔の好きだつたキリマンジェ口の荒びき。デミカツプではないけれど、小さ目のカップに濃い目にいれる。

毎朝二杯分いれて、一杯を柔の写真の前においた。

それから、八枚切りのトーストを一枚食べながら新聞を読んだ。

気が向けば、目玉焼きやハムをつけることもあつたけれど、だいたいはバターをぬつたトーストだけということが多かつた。

時々、近所のパン屋にトースト用のパンを買いに行く。朝の7時ちよつどに買いに行くのと焼きたてが買える。それは、近所の得意客に対するその店のサービスで、柔がいる時は、週に三回買いに行かされていたが今は一回だつた。

新聞を読み終わり、朝食を終えたと書斎に行く。

何度目かのボーナスで買ったリラックスチェアに身体を横たえ、僕は本を読み始める。

栞は読書日記をつけていて、それはノート5冊分にもなっていた。僕はそのノートに載っていた本を一冊ずつ読んでいた。……栞の足跡を辿るように。

時々、思い出して、二人で見た映画を見たり、後で見ようといつて録画していたNHKのドキュメンタリーを見たりもした。

昼食を取るのはだいたい2時過ぎだった。

買い置きのもつめんかうどんかラーメンを作って食べた。具はあまり入っていないが、それで充分だった。

それからまた本を読んだ。

他にすることは何もなかった。

夕方になると週に一度、スーパーに買い物に行く。同じ道を辿り、同じスーパーへと向かう。買うものは毎回たいして変わり映えがない。僕の料理のレパートリーはそれほど多くはなかったが、便利な世の中でインターネットでいろいろなレシピが検索できた。

そして、いつもと変わらない河原の道を歩く。春一番が吹いたとはいえ、まだ風は冷たい。

僕は、ただそこにいた。

そうしているだけでギリギリだった。

時がたてばどんな悲しみも癒されるのだというが、そんなことが本当にあるのか疑問だった。

そもそも、自分が悲しみの中にいるという認識が僕にはなかった。僕はただ失われた空虚感の中でもがいていただけだったからだ。

ふと川面に目をやると白いものが見える。

何か違和感を覚えた。

「……誰か、助けてっ。子供がっ」

若い女の悲鳴にも似た叫びが聞こえる。

(……子供?)

「しおりーっ、しおりーっ」

子供の名を呼ぶ女の声。

女が呼ぶその名前に僕は反射的に反応した。ただ自然に走り出した。

駆けつけた川べり。流れは思っているよりも全然速い。

上着を脱ぎすて、飛び込んだ。

衝撃と冷たさに、一瞬、意識が揺らいだ。

飛び込んだ水は春先とはいえまだ冷たい。水の中ではまだ冬も同然で、しかも手足の動きは鈍い。それでも、僕は絶対に助けるのだと決めていた。

彼女と同じ名前の子供が目の前で失われるのには耐えられなかった。

流れに逆らいながら何とか泳ぎきり白い塊を捕まえる。それから岸へと泳ぎ始めたが、水の中での着衣は手枷足枷に等しかった。

片手でシャツのボタンをはずしながらも、岸を目指す。

頑張れという声援が岸から飛んだ。母親の声に助けに駆けつけた人々らしかった。

何度も水を飲んだ。自分がどれだけ自分を甘やかしていたかを思い知った。

(……明日から、運動しよう)

岸にたどり着き、手を伸ばした男に子供を渡したときにそう思った。

「捕まれ」

もう一本伸ばされた手に手を伸ばす。土木作業員らしい無骨な男は、大丈夫かと僕に笑った。僕は小さくうなづいた。川岸は護岸壁になっていて高さがある。自分ひとりではうまく上れそうになかった。

男の手に捕まり、護岸壁をのぼろうとして手が滑った。握りなおそうとした無骨な手が、空を切る。

「おいつ」

本当に驚いた一瞬というのは声も出ない。

僕の身体は再び水に飲まれ……僕の意識はもみくちゃになった。水の中で、ぼんやりとこのまま眠れたら栞に会えるのかもしれないと思った。

第二章 弥勒丸(1)

目が覚めて、最初に目に入ったのは見慣れぬ白木の天井だった。

(……死ななかったのか)

それが良かったのか悪かったのか、僕にはわからなかった。
ゆっくりと布団の上に起き上がる。

(……ここは、どこだ?)

ゆづに10畳はある和室。床の間にかけられた軸は墨一色の山水画だ。誰のものかわかるほどの審美眼はないが、良いものだとは何となく思った。墨の濃淡だけで描かれているはずなのに、そこには色があったからだ。

(病院のはずはないな)

襖にはさらりとした筆致で貝や蟹などが描かれている。何の意味があるのかはさっぱりわからなかった。

だいたい、和室の病院なんて見たことも聞いたこともない。

ふと、違和感を覚えた。

(……目線が違う?)

それから己の手を見、ぐっと拳を握り締める。木刀のタコも、ペ
ンダコもないまだ柔らかい手。それは、僕が覚えているのよりもず
っと小さく細い。

(……子供の手だ……)

自分の身体が子供のものだと認識する。だが、それがいまいち信じきれず、周囲を見回した。

鏡らしきものはなく、枕もとの少し離れたところに水盤があった。黒の漆塗りの水盤を鏡代わりにのぞきこむ。

「……う」

思わず奇声がこぼれ出た。

ぼんやりとした水鏡の中、そこに映るのは、何度も夢で見たあの子供の姿だったのだ。

思わず、頬をつねる。

(……痛い)

それから水盤に手を振り、水盤の中の子供も手を振っているのを見て、それがやはり自分の姿なのだと理解した。

よく見れば格好だっておかしい。幼い身体に身につけているのは、寝間着らしい浴衣にも似た白い薄物。パジャマではない。

(着物に下帯……なるほど)

つまりこれは、やはりあの夢の中なのだと結論づけた。

(寝よう……)

そのままもう一度もぞもぞとかけられていた衾にもぐりこんだ。ふかふかの綿がぎっしりつまった布団に薄く綿をいれた衾を頭からひきかぶる。悪くない寝心地だ。

目を閉じる。

身体は疲労を覚えているのか、意識がすぐに揺らぎはじめた。そのことにほっと安堵する。

(目が覚めればきっと……)

戻っているだろう。

あの息苦しい、どこにも僕の居場所のない世界に。

二度目の目覚めは真夜中だった。

(……おかしい)

一面の暗闇……またしても先ほどの見覚えのない天井が目に入る。

「……おかしい」

思わず口に出した。

喉が渴いているのか、声がかすれる。

やや高い子供の声で、心のどこかでその夢のリアルさに驚いていた。

夢ならもう覚めてもいいはずだった。

(いや、もしかして夢だったのは、あちら側なのだろうか……)

かざした小さな手を握ったり、開いたりしながら考える。

妻がいて、二人の生活があつて……それは夢のように幸福な日々だった。永遠に続くと思つていた穏やかでささやかな日々……そして、一転してすべてが失われた無機質な世界。

「……夢……」

口に出して呟いてみると、何だか本当にそんな気がした。

「いやいや、わからんぞ……」

夢の中でまた夢を見ているのかもしれないと思い、もう一度横たわる。だが、おそらく身体は十分に睡眠をとつたのだろう。目を閉じても一向に眠りに沈むことは出来ない。

(仕方がない……)

起きることにした。

ぐーっと腹が鳴る。

「……腹、減つた……」

そう口にしたらもう一度きゆるきゆると腹が鳴った。夢の中でもこんなに腹は減るものだと知って驚いた。菜を亡くしてから、食べるということはただの栄養摂取でしかなかったので、こんな風に腹が減つたという感覚を覚えるのは久しぶりだった。

(……食い物探さないと……というか、誰か他に人はいないんだろ

うか……)

今の自分が、あの夢の中の子供なのならば……秀吉とその正室の間に生まれた一粒種のはずだった。もうちょっと大事にされてもいいんじゃないだろうか？

こういう場合、廊下や襖の向こうの別間には宿直がいて、護衛や何かがいってもおかしくないはずだ。

(いやいや、夢の中だからな……所詮……)

これが僕の想像力の限界、というところだろう。

(栞に話したら、きっと喜ぶのに……)

そう思ったら、じくりと胸が痛んだ。

栞はこの夢の話を好んだ。

細かいところまで聞きたがり、栞に話すために僕は夢の中の記憶を何度も何度もなぞって細部を思い出した。

そのせいなのが最初からなのか、僕は一度見たものをだいたい忘れない。まるでビデオテープを巻き戻したり、カメラをズームアップしたりするように記憶を思い出すことができた。

これはある種の特技といえる。

大学の試験の時なんかにはだいぶ役に立った特技だ。

立ち上がるうとしたときに、障子に明かりがさした。

(お、誰か来た)

どうせ目が覚めないのなら、この夢の中を満喫しておこうと思っ
た。

それは、もしかしたら逃避だったのかもしれない。でも、この時

の僕には必要な逃避だった。

がん、と障子が開く。

(乱暴だなあ)

年のころは20歳をいくつか越えたくらいだろうか。身体は大きいが顔立ちにはやや幼さが残るからもしかしたらもう少し若いかもしれないと思える青年が入ってくる。

青年は、手にしていた燭で慣れた様子で床の間近くの行灯に火をいれる。

「おい」

腹減った、と言おうとして、青年のものすごい表情に思わず言葉に詰まった。

何というか……最大級の驚きというものを表情にしたらこんな顔になるんじゃないだろうか。

ムンクのあの有名な絵にも似ている。

「弥々さまっ。お弥々さまー……っ」

腹に響く重低音。三大テノールも真つ青の音量に思わず耳を塞ぐ。

青年はまるで突撃でもするかのように抱きついてきた。

衝撃で一瞬呼吸困難を引きこした。

本人は抱きついていてもりなのかもしれないが、体格差からすると何というか……小さな子供がぬいぐるみのティディベアを抱きしめ潰してているような、そういう図にしかならない。

この場合、僕がティディベアだ。

「……く、くるしい」

むさ苦しいし、暑苦しい。

「お弥々さま、良かった。どこぞ、痛くはないですか？具合はいかがですか？」

青年の顔は、ぐしゃりと歪み泣き顔になる。
必死だった。そして、滑稽なほど真剣だった。

「……腹が減った」

「……そ、そうですね。一月も寝てたんですから、腹が減りましたよね」

(一月も寝てたって……何だそれ)

「おい、市松、こんな夜中に何を大声あげている。うるさいではないか……」

うるさいことには僕も同意する。だから、こいつを引き剥がして欲しいと思って、僕は様子を見に来たらしい男をジロリと睨みつける。

やってきた青年もまた、僕を見て絶句した。
どこか神経質そうな面差し……痩せぎすの身体はひよろつとして
いる。

(なんだ……?)

俺は青年を見上げ、凍りついたその姿に首を傾げる。

「……や、弥々丸さま……」
「うん？」

それが己の名であることを僕は知っていた。

正式には、弥勒丸というのだが、あまりにもあんまりな大仰な名前なので、弥々丸とか弥々と呼ばれることが多いのだ。
ぺたん、と青年は座り込んだ。

「弥々丸さま……良かった……」

市松と呼ばれた青年はおいおいと泣き出し、後から来た痩せぎすの青年も目元を押さえる。

その光景を目の当たりにした僕は、ただ呆然とした。

大の男が目の前で泣き出したのだ。
呆然とするしかなかった。

第二章 弥勒丸(2)

「弥々や、気分は悪くないか？どこも痛くないか？」

「……ほら、おまえの好きな甘葛の栗や。たーんとお食べ」
「おお、鮎の塩焼きもあるでな。どれ、骨とってやるつか」

呆然が行き過ぎると唾然となるのかもしれない。僕は何が起こっているのかいまいち理解しきれないで、ただただ何度も目をしばたかせる。

真夜中だというのに、明かりはこうこうと灯され、目の前には次々へと膳が並べられ、まだ運ばれてこようとしている。

「弥々や、どうした？他に何か食べたいものがあるんか？」

何でも作らせるで、と父は言う。

(父……)

そう。目の前のこの剽げた風情の小男は、紛れもなく父なのだ。理屈ではなく、単に感情というのでもない。ただ、己のすべてでそう理解していた。

「……おっかあの味噌汁が飲みたい」

するりと自然に口をついて出た。

(……ああ、そうか……)

「夢なのだと思った。」

「味噌汁かい？どれ、すぐに作ってこようね」

涙を拭きながら立ち上がるのは母だ。

「豆腐とねぎがいい」

「わかったよ。弥々は豆腐が好きだもんねえ」

「うん」

うなづくと、母は嬉しそうに笑った。

ふつくと暖かな印象のする美しい人だった。この時代で言うのなら、年増と呼ばれるのかもしれないがその柔らかな雰囲気か不思議と年齢を感じさせない。

僕は父を父であると思うのと同じくらい、この目の前の女性を母なのだと感じた。

戸惑いが無いわけではない。けれど、それは簡単に飲み込めてしまふ程度のものでしかなかった。

座敷中の人の注目を浴びながらも腹の虫の催促には勝てず、消化のよさそうな粥を口に運びながら、骨をとった鮎に箸をつける。

（俺は夢を見ていたのじゃな……）

あの美しい女と出会い、それを失う、長い長い夢。

夢であるはずなのに、じくじくと身体の真ん中が痛みを訴えている。

（不思議じゃな……夢だというのにこんなにも胸がいたむ）

時として、のたうちまわりたくなるような痛み。

(『彼女』がない)

ただ、それだけなのに、こんなにも『自分』が軋む。

「こっちはお弥々の好きな甘い玉子焼きじゃ。豆腐のあんかけもあるでな」

男は愛嬌のある笑みを向け、どんと皿を僕の前に押しやる。次から次へと料理が並べられた。

「……おっと」

すんなりとそう呼べた。口にしたら、他の呼び方はないように思えた。

「ん？なんじゃ？」

「……弥々は、夢をみとった」

「夢？」

「うん……長い夢じゃ……」

「どんな夢じゃった？」

男は笑う。

この男が、夢の中の歴史で知ったあの豊臣秀吉なのかの確証はない。

だが、この男は確かに今の自分の父だった。

(ならば、それだけでええ)

「……おっと」と、おっかあがおらんかった」

「何と！わしらがおらなんだか」

「うん。……それで、俺は他の違う家の子になってな……ずっと苦しかった」

「可哀想になあ」

父は夢の中の話だというのに、本気で涙を見せる。

「でもな、可愛い子がおつてな。その子を嫁にしたぞ」

幸せやったんや、と言うと、父は笑った。

痛みが少しだけ薄らいだ。

「そうか、そんな可愛かったんか？」

「うん。……優しくて、可愛くてな……でも、死んだ」

再び、ぐさりと何かが刺さった。

どくどくと血が流れる。

死んだと言ったときの俺の声音がよほど冷ややかに響いたのだから。父は、そつと俺を抱きしめる。そのぬくもりが慕わしく、そして、大切に思える。

「……死んでもうたんか」

「うん。……でも、俺は、あの子だけが好きや」

(例えあれが夢だったとしても、栞だけが好きだ……)

「そうか……」

父の脳裏に浮かんだ面影が誰だったのか僕は聞かない。この父にそんな風に甘酸っぱい顔をさせるのは母でないのだと何となくわか

っていた。

「苦しゅうて……苦しゅうて……どうしようもなく……そしたら、目が覚めた」

「……ほづか」

父はぎゅうつと抱きしめる手に力をこめる。

「……これが、胡蝶の夢って奴なんやるか」

(でも、夢やとしても、この喪失の痛みは真じゃ)

あちらでは今の自分を夢と思い、こちらではあちらの自分を夢と
感じる。

では、真実、現であるのはどちらなのだろうか。

「こちよこのゆめとは何ぞや？」

「夢か現か……現か夢かわからん心持ちいうやつや」

「ほづか……弥々は難しい言葉を知つとるんやな」

「俺は、夢ん中でいっぱい勉強したんやで、おつとつ」

抱きしめられていると安心した。

自分が幼い子供に戻ったみたいで……覚えのない幼児期を取り戻したような気がした。

「ほづか……どんな勉強しとつたんや」

身体のわりには大きな手が、頭をなでる。

「城の縄張りの勉強をしとつた……」

「ほお。城か」

「いつか、おつとつこの為に俺が城を建ててやるからな」

「そりゃあ、ええな」

「それで、おつとつとおつかあと……あの子を見つけて、皆で暮らすんや」

抱きしめる腕が小さく震えた。

「……お弥々よお」

声が湿っている。その声音に、何とも形容できない、温かみを感じた。

「……おまえが目が覚めてくれてほんに良かった」

……父は静かに泣いた。

いつの間にか戻ってきていた母もかたわらで泣いていた。

ほんやりとそれを目の端にとらえながら、何だか胸がじんわりと暖かくなっていた。

そして、僕は思った。

(……ここでなら生きていけるのかもしれない)

父と母のいるこの世界でなら。

第三章 父（1）

「……おっとう」

ちよこちよこと駆け寄ってくる小さな影。その後ろを小姓達が慌てて追いかけている。

一事はこの手の中から失われたお弥々の元気な姿に胸がつまった。あれから一年が経つというのに、未だにその姿を見るたびに涙がこみあげそうな気がする。

「おお、お弥々か」

飛びついてくる小さな身体……同じ年齢の子供に比べれば小さいかもしれないが、わしもそれほど大きくはないので仕方がないだろう。

剣術に興味があるようだったので、半年ほど前に小太刀の名人だという者を師につけてやったら、筋良いと褒められた。

城主の息子だから世辞半分によ、褒められるのは悪くない気分だ。自分が褒められるよりも息子を褒められたほうが何倍も嬉しい。

ちよこちよことお弥々に一緒についてきてぺこりと頭を下げるのは半兵衛の息子の吉助だ。半兵衛とわしの間でいまさら人質でもないやろ言うたら、弥勒丸様の傍においてご薰陶いただきたいと言うので、年齢も近いから遊び相手として引き取った。

互いに何か通じるものがあつたらしく仲良うしている。二人つれだつてちよこちよこと走り回っている姿は何とも愛らしいものだった。

（お弥々はわしの宝じゃて……）

目にしているだけで頬が緩む。

結婚して3年くらいの間におねは二度ほど妊ったが、貧しい生活の中での無理がたたって流れてしまった。

手をつけた女達も二人ほど子供を産んだ者があるが、どの子も三年とたたずに死んだ。

側室になおした南の産んだ石丸が五歳まで育っていたが、病弱な子でこれも育たぬだろうと密かに諦めていたところ、30になろうかという高齢で懐妊したおねが生んだのが弥々丸だった。

おねが子ができたのは己の守り本尊にしている弥勒菩薩のおかげだと言うので『弥々丸』と名づけたのだが、わしの子に仰々しい名はいかにも似合わなかった。

その為、わしは『弥々』とか『弥々丸』とかと呼び、いつしか皆もそれに習うようになった。

「どうしたのだ？何かあったか？」

「おっとうに昼飯をとどけにきたのだ」

小さな胸をはる様子も何ともかわいく、わしの頬は自然と緩む。

この子はこれまでの子と違い、健やかな子だった。子供らしくすぐに熱を出したりするものの、三日もすればいつもケロっと治っていた。

今までのほかの子らも可愛いは可愛いと思っただが、お弥々を見るともつと他の……言葉にはできない感情がこみ上げた。どういわけか、これは石丸には感じた事の無い気持ちだった。

(そのお弥々が……)

神隠しにあつたのは一年前だった。

神隠しと称してはいるもの、実際は何とすべきなのかわからな

い。ただ、わしらの前から一度奪われ、そしてまた戻ってきた。戻ってきたお弥々を見つけたのは、失われて三月を数えても諦められなかったおねで、小一郎は義姉上の愛情がお弥々を取り戻したのだと言った。

見つけたときは酷い高熱で、そこからまるまる一月は寝込み、このまま目覚めぬやもと誰もが危惧を抱いていたが、お弥々は無事に目覚めた。

今ではあの時のことが嘘のようにすっかり元気に飛び回っている。

見た目が愛らしいのも勿論だが、お弥々は賢い。これは単なる親ばかりではない。

まだ幼いはずなのに、時としてわしらはそれを忘れる。口ぶりもとてもしっかりしていて、話をしているだけで楽しかった。

「お弥々は、昼メシはもう食ったのか？」

「食った。おつかあの作ったこんぶの佃煮とごまのむすび飯や。うまかったぞ。……これ、おとうと小一郎おじの分だ」

抱えている風呂敷包みをわしに差し出す。

お弥々はかなりのいたずら坊主で、少し目を離せばどこにいったかわからないほどに、あちらこちらを元気に飛び回っている。

交代で守りをしているわしの小姓たちの苦勞は絶えないようだ。

とはいえ、小姓らはお弥々に振り回されるのを楽しんでいる風もある。

本当に神経をすりつぶしているのは神経質な佐吉だけだろう。その佐吉ですら、お弥々ににこりと笑顔を向けられて「ごめんな」と一言言われれば何も言えない。

わしや小一郎の子供の頃を考えても、似ているところはあまりない。

(……ああ、そうじゃ……お弥々は上様に似ておるかもしれぬな)

上様 我が主たる信長様は、常人では考えつかぬような着想でいろいろなことをなさる。

顔や見た目ではない。その、普通とは違うその閃きの部分がよく似ているように思う。

お弥々は、サルだのはげネズミなどと言われるわしとはあまり似ていない。どちらかというとおねよく似ていて、目元や鼻筋がそっくりだった。

わしと共通しているのはその目の色だ。目玉というのはよく見ると茶色い円の中に黒い丸い中心部分があるものだが、わしと小一郎はその茶色の部分が青みがかった灰色だった。

これはかなり珍しいらしい。最初にこの目の色に気付いたのは上様のご側室である吉乃さまで、何かの拍子に上様に知れ、それをおもしろがった上様が見たいとおおせになって召し出されたのが草履取りにしていただきっかけとなった。

これは姉のともと弟の小一郎とは同じだが、父親の違う妹であるさとは違う。上様曰く、これはわしらの父親の血に出る特徴なのだろうということだった。

子ができた時、上さまはいつもその目かどうかをお聞きになった。

(そういえば、お弥々が元服したら自分の娘を嫁にくれてやるなどとおっしゃっておった……)

上様のことだからもう忘れていかもしれないが。

わしの小姓らがお弥々に対する様子はそのまんま、上さまに対するわしのようだ。

(わしも、上様に褒めてもらいとうて……)

それだけでここまで来たようなものだった。
思えば随分と遠くに来たものだと思う。

百姓の子が、今や北近江十三万三千石の城主様だ。

「……殿？どこかお加減でも？」

茶を入れた竹筒をさしだした佐吉が怪訝そうに呼ぶ。

「あ、ああ、いや何ともない……うん、うまいな」

わしは結び飯にかぶりついた。

今日のお弥々の当番は市松と佐吉だ。

この当番の組み合わせを決めたのはお弥々で、その人選の妙にわしも小一郎も感心した。お弥々は智謀を誇る近江出身の小姓らと武勇を誇る尾張出身の小姓らから一人ずつを選んで当番を組み合わせるようにしたのだ。

あまり仲良うないそれぞれの小姓らだったが、お弥々は様子を見ながらそれを適度にひっかきまわし、互いに助け合わねばならぬような事態をたびたび作りだしている。

そして、ことあるごとに角付き合っていた者らにそのたびに言葉を尽くして諭したり、教えたりしながら双方の理解を深めていった。そのせいだろう、昨今はだいぶ衝突も少なくなってきたようだった。そもそも、大概のいさかいというのは理解不足が原因だ。互いによく知り合えば、もめ事はだいぶ少なくなる。

わしはお弥々に目をやった。

吉助と何やらひそひそ話している様子を見ると、またぞろ何やらしでかすつもりらしい。市松と佐吉もちらちらと気にしている。この二人は仲が悪いので、してやられることが一番多いのだ。

お弥々は、この年齢の子供とは思えぬ判断力と思慮深さを見せる。智謀自慢の近江の小姓らも、武勇自慢の尾張の小姓らも、皆、お弥々の前では素直になる。神隠しにあっていた時の夢の中では30を数える大人の男だったと言うのだから、それも道理だった。

(何せ、あの半兵衛がほんに感心しとつたしな……)

羽柴の家の知恵袋、最高の軍師たる竹中半兵衛が、このお弥々の判断力に一目も二目もおく。半兵衛は、常々、羽柴の家が世継にお弥々を得たことは幸運じゃと申しているとも漏れ聞く。

確かにお弥々のような跡継ぎを得たわしは最高の幸せ者じゃと思ふ。

だが、それは何もお弥々が賢い子だからというわけではない。うまくは言えないが、お弥々がどんな子供であつてもわしはお弥々がお弥々である限り、愛しく思ふのだからと思える。

(お弥々の心は大人のそれだ)

それでいながら、子供の部分も切り離しきれない。お弥々はそれとうまく折り合いをつけている。子供扱いされても、大人扱いされてもたいして気にした風もなく、当人はいたって普通だ。

そして、知識を誇るでもなく、殊更おかしなところがあるわけでもない。

それでも時々辛くなることがあるのだろう。ひどく甘えてくることがある。

わしはそういう時に甘やかしてやることのできる父親でありたいと願い、努めていた。

第三章 父(2)

「弥々さまも何ぞ召し上がりますか？」

「いや。茶、くれ」

「はい。どうぞ」

吉助がかいがしくお弥々の世話をしている。

お弥々のただの遊び相手のつもりだったが、幼いながらも吉助は既に小姓としての役目を充分に果たしている。

勿論、できぬこともたくさんあるが、努力している様子はとても感心する。勉強も剣術も弥々と一緒に努力しており、半兵衛の息子らしく筋は良いという。

(じゃが、やっぱりお弥々がいつとう可愛いのう)

わしやおねの話をとても聞きたがり、一緒にいたがる。

わしが城にいて政務をとったり陳情を聞いたりする時は、常にわしの膝にいてにこにこ笑っている。つまらないだろうと問えば、「おっとうといるだけで嬉しい」という言い草だ。それも決して子供の賢しさではない。心底そう言っているのがわかる。

親馬鹿がすぎると言われるかもしれぬが、たった一人の我が子にそんなことを言ってもらえるというのは冥利につきることだ。

わしがお弥々をすきなものと同じくらいお弥々はわしを好いておる。わしはそれを知っている。お弥々もまた知っている。

だから、視線が合うとわしらはいつもくすぐったい気分になり、互いに笑みをかわす。

この時に互いに通い合う柔らかな感情やぬくもりを親子の絆というのではないかとわしは思う。……それは、幼いわしが欲しいと思

いながらも与えられなかったものだ。

わしは、それをお弥々を得ることで手に入れた。

お弥々だからこそ与えてくれたものなのだと思う。

「殿、お弥々さまは相変わらずやんちゃなようで……」

「うむ。この間など、城下の明かりが見たいと夜中に寢床を抜け出すものだから大騒ぎじゃ」

「……誰も気付かなかったので？」

「吉助だけはいつも一緒じゃな」

「……一緒に寝ていたの？」

「まさか。吉助とはちゃんと示し合わせておる。宿直を引き剥がすための陽動は吉助の役目じゃ。……もちろん、後で合流しておるがな」

はあとわしは嘆息する。

「何とも息のあった主従で……」

「良いのか悪いのか……」

苦笑してみせるものの、本気で困っているわけではない。

「良いではありませんか。……吉助はお弥々様を絶対裏切らないでしょう。そういうものがお側にいることは安心です」

「……そやなあ」

小一郎はお弥々と吉助を見ながら小さく笑う。確かに微笑ましい一対だ。

「お弥々様がおれば殿も安泰です」

この弟はいつも殊更わしに丁寧だ。人目のあるところではわざと『殿』と呼び、『お弥々さま』と呼ぶ。

わしの実弟であり、無二の股肱であり、わしにとって最も頼りにする補佐役である小一郎がそうやってわしを上置き置くことで、この羽柴という成り上がりの家においてもわずかな権威と上下関係とが生まれる。

小一郎があえてそう気を配っているのをわしは知っているし、それを有難くも思っている。その気遣いが、わしの至らぬところを補ってくれているのだ。

だが、小一郎があまりにもわしに丁寧に接するので、わしと小一郎は父親が違うという噂が流れてもいたりもする。小一郎はそれを否定しない。その方が都合がいいからだ。

この弟の思慮深さは、我が家を安泰にせしめている大きな要因の一つだ。

「あ、小一郎叔父、のりが全部についているのは小一郎叔父の好きな梅干やぞ」

「おお、義姉上の梅干か……それは有難い」

小一郎の頬が笑み崩れている。小一郎にも子がいない。ゆえに、お弥々がわが子のように可愛いといつも言う。

先頃、お弥々が寝付いていたときは、近くの自社仏閣に病氣平癒の加持祈禱をさせたらしい。神仏の助けなどで病が治るか！というのが小一郎の持論で……この弟は変なところで頑固な現実主義者なのだ……自分の為は勿論のこと、わしの為にもそんなことをしない

のだが、弥々のことになるとうつやらタガがはずれるらしい。

お弥々もまた小一郎には懐いていて、小一郎を見るといつも嬉しそうににこにこする。

「……おつとうと小一郎叔父は、そろそろ、また播磨に戻って戦じやなあ」

大人びた口調で溜息をつく。

「そうじゃな」

播磨は豪族や小大名が入り混じる難しい土地だ。数年前からずっと謀略の手をのばしているもの一朝一夕にはどうともしがたい。

「なんぞ、策はあるかの？」

わしは面白半分に問いかける。

「ないわけではないけど、机上の空論になりかねんもん」

「きじょうのくうるん、とは、何ぞ？」

「理屈倒れっちゅうことや。現場を知らん俺が言うても説得力ないやんか。それに、細かいことをここで言うても状況次第で変わるもんやし……」

「そら、そうや」

数え七つとは思えん頭のめぐりの良さにわしは嬉しくなる。まあ、夢の中では三十を過ぎた大人の男であったのだと言うのだから、それほどおかしいことではあるまい。

「……あのな、人の心を、獲るんがええと思う」

おつとつ得意技や、とお弥々は笑った。

「人の、心か」

「そうや。おつとつは上様の部下じゃが、上様とは違うということ
を播磨の人に知ってもらうんが必要と思う」

「ふむ」

わしと小一郎は、お弥々の言葉に耳を傾ける。

「上様のなさりようは苛烈じゃ。新しい世を拓くにはそれが必要じ
やろうと思う……でも、ただの人にはそのなさりようは恐ろしいこ
ともあるでな。叡山の一件かて耳に入ってるやろうし、織田は皆恐
ろしいと思つとるはずや。だから、おつとつや小一郎叔父は、織田
家の人間やけど、ちいっと違うぞと皆に知ってもらうのがええと思
う。そんな時に百姓の出やというのは都合がええな」

「なんでや」

正直言つて、わしは百姓の出であることを負い目に思っている。
身分低きことをさんざんバカにされてきたし、そのことを隠したい
とも思っているのだ。

「だって元は百姓や。武術はそれほど得手やないのや言えば、それ
はそうやろうと思われる。恐ろしげな織田の家中にもそんな人間も
おるんやと思われれば、何やこれは違うかもしれんと思ってもらえ
るかもしれん」

「それはそうやけど……」

「おつとつは百姓の出やいうことが恥ずかしいと思つとるかもしれ
んが、そんなことはない。だって、考えてみるとええ。どんな高貴
な血筋も、最初は成り上がりやで」

お弥々は、にぱつと笑みを浮かべてあっさりと言う。

「上様の織田家は守護代の分家じゃ……だが、そのそもそもその守護代や守護のお家かて、元は土豪や百姓に毛の生えた程度の侍ではない」

どのような名家であろうとも、確かに家を興す最初の一人はただの人であろう。

「それが出世し、代を重ね……織田家にいたつては、信長様という殿様を生み出すことで、今になつたんじゃから……」

何も殊更、恥じることはないである、とお弥々は言う。

「お弥々……」

気負うでもなく、さらりと言われた言葉は、不思議とわしの心にすんなりとしみこんだ。

それは、小一郎にも同様だったようだった。その顔が晴れやかに輝いている。

「わしや小一郎が羽柴の家を興す……そして、お弥々やその子の代になれば柴田殿や丹羽殿のような普代の衆と肩を並べ……代を重ねりゃあ、それ以上になるかもしれんというわけやな」

お弥々は不思議な笑みでうなづいて口を開く。

「羽柴の家は成り上がりや。俺はそれを恥ずかしいと思わん。だから、むしろそれを利用すべきや。播磨の者は古い血筋を誇つとるや

る。じゃからそころくすぐってやればええ。『ぜひと教えを乞いたい……わしらのような百姓あがりには貴殿のような名族の手助けが欲しいのや』言えば、わかつてはおつても悪い気はせんやろ」「舐められへんやろか?」

「そんならそれだけの奴やいうだけじゃ。……そついうのは、おつとつ得意やろ」

「くすぐってやるのやな」

「そや。……俺も一緒に行けると良いんじゃがな」

「こんなに小さいと戦場では何もできん、と不服そつに口を尖らせる。

「そないなこと気にせんでええ。弥々はな、病にならんで大きゆうなつてくれればええんじゃ」

そつと頭を撫でる。多くを望むつもりはなかった。ただもつ、無事に育ってくればそれだけで良かった。

「そつじゃ。……弥々丸はたくさん勉強もしとると聞いた。半兵衛が感心しとつたが、無理はせんでええのじゃぞ」

小一郎も口を添える。

あの己の才に自信を持ち、誰もがそれを認めている男は、お弥々を対等の相手と扱っている節がある。さほど言葉を重ねているという風はなかったが、互いに認め合うところがあるのだろう。

「大丈夫じゃ。……それに学問はな、夢の中でもいっぱいしたのじや」

だから、思い出してるようなもんじゃ、と弥々は軽く肩を竦めて

みせる。

「……そないにたくさん勉強したのか？」

自身、かなり勉強家な小一郎が真面目な顔で問うた。

「うん。……人にも教えとった」

こともなげに弥々は言う。それはわしも初耳だった。

「……人に、何を？」

「教えとったのは建築いうて、城の縄張りのことや、材料のことや……そういったことだな。でも、勉強は他のこともいっぱいしたんじゃないぞ」

「他のこと？」

「そうじゃ。……算術や書やそういったことやな。漢籍や古い物語なども学ぶし、異国の言葉なども学んだな」

「異国の言葉……」

「……書は修練である程度までは上手くなる……夢の中でも修練しとったしな。あとは、ただ、心じゃ」

強き心時には強い字が、弱き心時には弱き字が書けると、弥々は言う。

小一郎はその言葉に目をしばたかせ、それから深々と溜息をついた。これは、この弟が本当に、心底、関心した時だけの癖だ。

「弥々丸は、ほんまにたくさん学んできたのじゃの……」

「うん。……まあ、焦っても仕方ないからの。今の俺にできることを頑張る。留守の間、おつかあとおばあのは心配せんでええよ」

「……お弥々は頼もしいのう」

わしはくしゃりと頭を撫でた。

此度の戦は総力戦であるからして、この長浜の城に留守居の兵はほとんどおかない。小一郎のおかげで領内はよく治まっているので一揆などということもないだろうが、それでも留守居は誰にでもできることではない。

だが、この子がいるのだから大丈夫だと思う。まだ幼いが、弥々は既に一人前の男だった。

「せめて留守くらいは守れんとな」

やわらかく笑う。

この子の笑顔は周囲を明るくする。

わしは、こうしてお弥々が笑っていれば、何もかもが大丈夫だという気がしていた。

第四章 吉助(1)

「よいか、そなたは夏が終わったら弥勒丸様のお側にあがることになる」

父が僕にそう告げたのは、天正6年の夏のことだった。

ほとんどを播磨の陣中に在るとはいえ、上様への報告などで安土を訪れる行き帰りなどには菩提山にも立ち寄り、僕の学問の進み具合をみてくれたり書を見てくれたりもする。

留守がちでそれほど多く話した記憶はなかったけれど、マメに文をくれる人だったのでもいつも気にかけてもらっているという感じがして、僕ら兄弟はみんな父が好きだった。

さほど丈夫でない父の手助けが早くできるようになりたくて、僕は学問も剣術もどちらも疎かにすることなくうちこんでいた。

「羽柴の殿様の御嫡子ですね？」

「そうだ。弥勒丸様という」

弥勒菩薩からとったのかもしいれないが、すごい名前だよな、とぼんやりと思った。

「そなたは、弥勒丸様の元で、ご薫陶をいただくように」

父は真面目な顔で言った。

(……弥勒丸さまのご薫陶?)

不思議なことを言うと思った。

僕は父が父であるせいなのか、あまり子供らしい子供として育たなかった。年齢より大人びていると言われて来たし、事実かわいげのない子供だった。そんな僕が一つ年下の子供の薫陶をいただくなど何の冗談かと思っただのだ。

「弥勒丸さまは、神隠しに遭われていたとお聞きにしましたが……」
「そういうことになっている」

「本当は違うんですね？」

「……真実がどうかは誰も知らない。事実だけを述べるのなら、石丸君を亡くした南殿の気が触れ、弥勒丸さまを石丸君と思い、小姓らの目の前で攫い、弥勒丸さまを抱いて堀に飛び込んだ」

「……堀に……」

「南殿の亡骸はあがったが、弥勒丸さまは見つからなかった」

父の言葉は澱みがない。

「お堀ってそんなに深いんですか？」

「……深いは深いのだが、底なしというわけではない。何人もの人間が潜つたし、終いには底さらいまでした。……だが、それでも弥勒丸様はみつからなかった。見つかったのは、印籠と小刀だけだった」

「……弥勒丸さまは？」

「亡骸は見つからず……そして、行方知れずになってちょうど一月後、竹生島に参詣しようとしていた奥方様が琵琶湖の岸边に倒れている弥勒丸さまを見つけたのじゃ」

「だから、『神隠し』と」

「そうだ」

父は深くうなづいた。

「最も、それは表だけの事情だな」

「裏の事情があるのですか？」

物事にはすべて表と裏があると父は言う。父は無言でうなづいた。

「他言無用のお家の秘事ではあるが、おまえには話しておく」

僕は姿勢を正した。

父が僕を一人前と見込んで話してくれる事だからだ。

「石丸君は殿のお種ではなかったようだ。……少なくとも南殿はそう信じていた」

「……え？」

「気の触れた南殿が呟いていたことだから真実かどうかはわからぬ。……だが、おそらく、それは事実だったのだろうと思う」

「なぜ、ですか？」

南殿という方が長浜より以前からご側室であったことを僕は聞いていた。

「それはわしらには預かり知らぬことだ。だが、事実だけを述べるのならば、南殿はその罪の意識にずっと怯え……、石丸君が亡くなり、己の罪が石丸君を殺したのだと思ったようだ」

そして、その罪の意識がやがて南殿の心までも殺した……と父は言った。

「今となってはもうどうでもいいことだ……弥勒丸さまはお戻りになり、すっかり元気になられた。……だから、皆、忘れる事にした

のだよ。南殿を……そして、南殿の罪を……」

忘却は最大の罰だ、と父は言った。

僕はよくわからなかった。

ただ、何だかひどく哀しいような気がしていた。

「……そなたは、弥勒丸様のことだけ考えて生きよ」

羽柴秀吉という男に人生を賭けた父は、その息子に僕の人生を賭けるようにと命じた。

「はい」

僕はうなづいた。

僕にとって、父の言う事は絶対だった。

父は満げにうなづいた。ほんの少しだけ笑っていたように思う。

実際に弥勒丸さまの下に、僕があがったのは秋も半ばをすぎたひどく寒い日だった。

「おまえが吉助？」

子供らしい澄んだ高い声でした。

(……力のある声だ)

対面の間はがらんと広い。上座にある火鉢だけでは到底室内は暖めきれず、どこかピンと張った冷たい空気の中、その声はかすれることなく響いた。

「はい。……本日よりお側にあがりませう、竹中重治が一子、吉助と申します。」

頭を下げたまま名乗りをあげる。

「面をあげよ」

そう言われて顔をあげた。

そこにいたのは、秀麗な顔立ちの子供だった。

(に、似てない……)

殿のことは僕も知っている。父を得がたい部下と思つて下さつて
いるらしい殿は、僕や母にまで細かい気遣いをしてくれるような人
でこれまでも何度かお目にかかったことがある。

目の前の若君は、顔だけのことを言うのなら殿とは似ても似つか
なかつた。

言つては悪いが、殿は風采のあがらないちよつと頭のハゲあがつ
たおっさんだ。『猿』という綽名通りの御方なのだ。元が百姓の出
だというが、確かにその通りだ。きつと、この長浜の城主だなんて
言われても初めて殿にあつた人はたぶん信じられないだろう。

でも、弥勒丸様は違つた。

とても整つた顔立ちをしていて、どこの名家の子息だと言われて
も皆が納得するだろう品のある方だった。強いて言うならば、とて

も美しい方である奥方様に似ているということになるのかもしい。
い。

「俺のことは弥々でいいぞ」

「……弥々様、ですか？」

「うん。俺は吉と呼ぶでな。その方が身近な感じがするやろ。ずっと側にいるんや。堅苦しいのは御免じゃ」

はは、と陽気に笑う。その笑顔に見惚れた。

トクンと心臓が鳴った。

「じゃあ、吉、行こう」

「……どこにですか？」

「台所じゃ。今日は栗飯の日でな。炊き立ての栗飯でむすび飯を作ってくれとおっかあが言ったんや」

弥々さまは、地下の訛りを隠す風でもなくそのまま口にする。

「……ああ、言葉か？ええんや、今はこれで」

すぐに僕の聞きたいことがわかったらしく、にやりと笑う。

(……今は？)

「客前ではちゃんと普通にしゃべるでな」

「でも、城の若君さまが尾張の地下の訛りでお話になるのは……」

「いいんじゃないよ。近江は近江で別の訛りがあるが、羽柴は尾張の出身やからな。少しくらいなまっていた方が百姓や足軽やそんな者らが俺らを身近に思えるやろ」

「そんな身分軽き者に気をつかわなくても……」

「でも、吉助。民のほとんどがその身分軽き者だぞ」

弥々さまはあっさりと言う。

「それは……」

「身分高き者の力も大事じゃが、名も無き大勢の民の力もまた大事じゃぞ」

「なぜ、ですか？」

「だって、民がいるから、俺はお城の若君なんじゃ」

民がおらなんだら、ただのクソガキじゃと肩をすくめる。

「弥勒丸様……」

驚きで目を見開きながらも、すとん、と胸に落ちるものがあった、僕は不意に何かを納得した。

何をとほつきりと言葉で示すのは難しいのだけれど、自分の中に生まれたものがあつたからだ。

父が『薰陶』という言葉を使った意味がよくわかった。

(僕は、この方に御仕えする)

この先、何があるうとも僕はこの方にお仕えしよう。

この方が見るものを一緒に見て、この方が話す言葉を聞きとめよう。

この方を狙うものがあらば盾となり、この方の命あらば剣となるう。

父に言われたからではなく

僕がそう決めたのだ。

第四章 吉助(2)

「吉は、栗飯好きか？」

弥々さまは、食べることも好きな方だった。

といっても食い意地がはっているというわけではなく、さりとしてこだわりが強いというわけでもない。強いて言うのなら、食べることをとても楽しめる方だったというべきだろう。

僕は好き嫌いの多い子供だったけれど、弥々さまと食事をとるようになってからは、不思議なくらい食べられないものがなくなつた。

「はい。大好きです。……弥々さまは？」

食べ物の好き嫌いを論じることはあまり良いことではないと思つてはいたけれど、素直に答える。それから、付け加えてたずねてみた。弥々さまについて、僕は知りたかつた。

「俺も好きじゃ。芋飯や菜飯も好きやな」

「何か具が入っているのが好きなんですな」

「白い飯も好きやぞ。炊きたての飯を塩だけで握つたむすび飯は最高やし、それにひしおをつけて焼きむすびにしても旨いな」

「青菜の漬物を刻んでゴマふつて混ぜごはんにしてもうまいですよ」

それは、育ち盛りでしょっちゅうおなかをすかせていた僕に母がよくつくってくれたおやつだった。

ここのお城で食べるような白米ばかりのごはんではなく、麦の分量が多いごはんだったけれども、それでもとてもおいしかった。

「へえ」

弥々さまは目を輝かせる。

こんな風な表情をしていると弥々さまは普通の子供だった。僕らはうまい食べ物の話をしながら厨へ向かう。

弥々さまは、道々にあるいろんな場所を説明してくれた。

僕は教えられるたびに、それを忘れないように頭の中に書き込んでゆく。

長浜のお城は、僕が育った山の屋敷と違ってとても広くて、一度には覚えきれなかった。

厨には奥方様がいらっしやった。

僕はそれにもちよつとだけ驚いた。北近江十三万石の城主夫人ともなれば、厨に入る必要はまったくくない。

だが、奥方様も弥々さまもまったく気にしていなくて、そこに奥方様がいるのが当たり前というように弥々さまは声をかける。

「おつかあ、栗飯は？」

「勿論、できとるよ」

(……栗の分量が……)

栗のむすび飯は、米と栗が半々じゃないだろうかと思うほどの栗の量だった。

「栗がいっぱいいな」

「弥々は栗が好きやろうが」

「うん」

にこにここと弥々さまは笑う。

「あと、きのこの味噌汁も作ったよ」

「ありがとう、おっかあ。……吉、食べよう」

「……ここですか？」

「うん」

弥々さまはうなづく。

普通は部屋に運ばせて食べるものだった。厨に膳を並べるのは身分低き者だけ。

殿がお留守の今、幼くとも弥々さまは城主様なのだから厨で食事をするのはあまりよくないことだと僕は思った。

「あの、部屋で食べた方が……」

僕と同じ考えの人が他にもいたようで、おそろおそろ申し述べる。

「あつたかいうちに食べたいし、せつかくの初物の栗やもん。ここでおっかあと一緒に食べる。その方が旨いやる」

弥々さまはにっこりと笑う。

ほわりと空気が柔らかくなり、そこにいた皆がつられて笑った。

「そういうことやから、さあさ、弥々と吉助の膳の支度をおし」

おね様がぱんぱんと手を叩くと、すぐに栗のむすび飯ときのこの味噌汁と古漬けの瓜を薄く刻み、生姜醤油をかけたものが出てくる。

「これが俺の好物なんや」

この古漬けの瓜をきざんだものに生姜を散らし、醤油をかけまわ

したものを弥々さまがとても好きなのだ。僕は父から聞いて知っていた。

夏の最中、膳部の者がしくじって大量の瓜を古漬けにしてしまった時に、弥々さまが作り方を教えたもので、膳に上ることの多い品なのだ。

その時、父は言っていた。

『弥勒丸さまがそれを本当にお好きだったかはわからない。だが、それが弥勒丸様の好物となったことで、膳部の人間は一人も処罰されなかった……本来ならば、たいそうな失態で、殿も怒り狂っていたのだがな……』

『それは……』

たかが漬物一品のことと笑う無かれ。漬物というのは城中の人間全員に当たるようにまかなわれているものだ。そして、だめになったのは決して一日分の量ではあるまい。だとすれば、その損失はかなりのものになる。

『……弥勒丸さまは、他の漬物はほとんどお食べにならない』

僕は少しだけ驚いた。もしかしたら、漬物は嫌いなのかもしれないな
かった。

『弥勒丸様とはそういうお人だ』

父の言葉に僕はうなづいた。

「僕も好きです、これ」

それを聞いたときから、僕はこれを好きになった。
弥々さまは、うん、と満足げにうなづいてくれた。それが何だかとても嬉しかった。

「弥々、おかわりは？」

「にぎり飯がもう1個欲しいな」

「1個でいいの？」

「うん。吉にもな」

「……ありがとうございます」

僕は軽く頭を下げる。

少し物足りない感じだったから、弥々さまがそう言ってくれて嬉しかった。

まだ城に来て間もないのに、ずうずうしくおかわりを申し出るこ
とができるほど僕は肝が太くない。

弥々さまはそんな僕の様子をよく見ていて、いつも気遣って下さ
る。

「前、佐吉と虎が食い物のことでケンカしたんや」

「……いつものことですね」

佐吉殿とお虎殿は犬猿の仲だ。佐吉殿のいつでも冷静沈着なところ
が虎殿には嫌味に感じられ、虎殿の豪放磊落でおおらかなところが
佐吉殿には乱暴で大雑把に感じられるらしい。

まあ、僕にいわせればどっちもどっちだ。

「虎が今日の味噌汁は塩辛い言うて、佐吉が君子たる者、食い物に
ついていちいち申し述べるのは卑しいって言うてな」

この二人のケンカの原因はいつもたいしたことではない。

「そんな時に言ったんやけどな、『食べる』というのは生きることの基
本だから別に卑しくないと思うのや。塩辛い言うのも、まあ時々う
るさいこと言うなって思うかもしれんが、おいしく食べるのは大事
だからええと思うのや。俺は、卑しいのは、『食べる』ことに真摯
じゃなくなつた事を言うのだと思うんや」

「食べる事に真摯じゃない、とは？」

「あんな。大阪の商人の間で流行つたそうじゃが、鯛の頬肉だけを
こそげてそれに大根の甘いところだけをおろしたものをかけて食べ
る料理があるんやとか」

「残りの部分は……」

「自分では食べんそうや……驕つとるやろ」

使用人や下の人間に下げるのだから確かに無駄にはならないのか
もしれない。でも、それはひどい驕りだと僕は思う。

「……それは……」

「俺は、そういうのは好かぬ」

「僕もです」

「そやろ。俺は確かに食べる事が好きやけど、そんな珍奇なものを
食べたいわけじゃない……異国にはなあ、猿の脳味噌やら熊の手や
らをありがたがって食べる国もあるのじゃぞ」

「へえ……」

弥々丸さまはいろいろなことをご存知だった。

「弥々丸さまは嫌いなものがありますか？」

「……俺は大概のものを好き嫌いなく食べられるつもりだが、蝗は
無理だなあ」

「蝗、ですか？」

「尾張にはなあ、蝗の佃煮があるんや……なんていうか……俺は見るだけで食欲なくす」

あと、身体にはいいかもしれんが、蜂の子の食べぬ、と顔を顰める。

そのげんなりとした表情を初めて見て、僕は何となく嬉しかった。好きなものについてはよくお話になるけれど、嫌いなものについてお話になるのはとても珍しいことだった。

弥々丸さまは僕に対し、とても正直に素直に接してくれた。だから、僕も同じように正直に素直になることができた。

語り合う言葉の一つ一つが、弥々丸さまの見せる表情の一つ一つがとても大切に思えた。

「……おつかあ、味噌の味が変わったな」

「まあ、わかったかね」

「うん。塩が違うんやるか？」

「そうや。最後の塩で作ったんよ」

「へえ」

「やっと満足のいくものができたで、おまえの膳にあげたんじゃ」

これまでは厨の者と下働きの者で消費していたのだと奥方さまはおっしゃった。

「うん。……これは、うまいな」

「お弥々はちゃんと味わってくれるから、皆もつくりがいがあるというものだね」

おね様の言葉に弥々さまは、「皆、ありがとう」と笑って言った。

皆、一瞬、ぽかんとし、誰も何も言えないでいた。それから、差配の老女が「もったいないお言葉にございます」と申し述べて叩頭

した。皆がそれに続いた。感激のあまり目頭を押さえる者もいた。羽柴の殿の人誑しは天下一品と言われるが、弥々さまもまた人誑しがうまかった。

殿が故意にそれを行うなら、弥々さまのそれは無意識だったから余計に性質が悪いような気がしなくもない。

（親子なんだなあ）

顔はあんまり似てなくても、やっぱり親子なんだな、と僕は変なところで感心していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7420y/>

夢のまた夢

2012年1月1日01時48分発行